

「釘ひとつ打つ」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 神戸高校創立 129 周年式典に寄せて、私が伝えたかったこと

学校の教育活動に関わるほぼすべてを把握し、整理し、必要なことを私たちに正確に伝えてくれる総務部長の澤田先生ですが、その話だけにはにわかには信じがたい話でした。曰く「創立 129 周年式典にあわせて式辞のご用意を」との依頼をされたのです。昨年度は前任校で創立 100 周年の式典を開催させていただいた私ですから、式辞の作成は初めてではありません。とはいえ、『129 周年式典』との言葉の響きには違和感がありました。

多くの学校は「創立記念日」のお祝いをします。しかし、毎年「周年式典」を行う学校はそんなにあるわけではありません。少なくとも私は初耳でした。とはいえ、記念講演を本校 33 回生の兵庫県副知事 服部洋平様をお願いすることが決まっているとなると、背筋が伸びます。

服部副知事は入庁以来、兵庫県において一貫して街づくりに関わることに尽力してこられました。講演の演題も『兵庫の防災と減災』と伺っていました。とりあえず式辞の冒頭と締め括りは定番のものにするとして、中心にどのようなメッセージを流し込むか。悩んだ末に私は『釘』の話を中心に据えることにしました。

歴史ある本校で学ぶ生徒の皆さんに今、何が期待されているか。ここで私はひとつの歌を伝えたいと思います。『劫初（ごうしょ）より 作りいとなむ殿堂に われも黄金（こがね）の釘ひとつ打つ』与謝野晶子の一首です。「劫初」とは世界の始まりという意味です。はるか昔、世界が始まった頃から人々がつくってきた芸術世界という美しい建物に、私も小さな 1 本ではあるが、黄金に輝く釘を打ち付けるのだ、という意味になります。

時は大正 11 年、婦人参政権が実現する 20 年も前、まだ女性が自分たちの思いや情熱を言葉にすることがためられた時代に、晶子はこのように歌ったのです。『人類が積み重ねてきた芸術の歴史に、ささやかであるかもしれないが私は足跡を残すのだ。しかも黄金に輝く足跡を』と。この覚悟と矜持。矜持は英語に訳するとプライドとなります。「自分は必ず成し遂げるのだ」という誓いに似た思いがいかに傲慢で、いかに美しいか。

黄金に輝く釘、どうか打ち付けてください。やがて創立 130 年を迎える本校で学ぶ皆さんが、小さな 1 本でもいいからこの世界に黄金に輝く釘を打ち付けてやろうと、生命絶えるまで、もがいて、足掻いてみてください。そして歴史を、世の中を動かしてください。その実現のために、身につけるべきなのは、本校に脈々と伝わる「質素剛健」、「自重自治」の四綱領の精神に他なりません。何事にも真摯に、しかも全力で打ち込む姿勢に勝るものはありません。そして、その姿勢の崇高さはどんなに時代が移ろうとも色あせることはないのです。

神戸高校の歴史はおそらく、自分だけが持つ釘を打ち付けようと、高い壁に挑んできた先輩方の歴史に他なりません。いつの日か皆さんの打ち込む 1 本の釘が、将来にわたり世の中を席卷するよう、心から願っています。

○ 校長室の華

記念祭を前にして、華道部が校長室に飾ってくれた生け花の花材はスプレーカーネーション、テンモンドウ、そしてリアトリス。果穂が麒麟の首のように長いリアトリスの別名は麒麟菊。すくっと姿勢よく立ち上がる姿がきれいです。そのためか、花言葉のひとつに『向上心』があります。はた目から見ても、実にまっすぐに伸びゆく向上心。ただただ憧れてしまいます。

服部副知事のご講演をお聴きしていると、「安心安全な兵庫づくり」に真摯に向き合っただけのお仕事ぶりが伝わってきました。そのとき、私の脳裏に浮かんだのは、まさしくリアトリスの背筋です。そう言えば最後に副知事は言われましたね。『この中から環境政策の道に進んでくれる生徒が出たら嬉しい』と。皆さんは将来、どの世界に釘を打ち込みますか。

